

願望のヨーロッパ・再考 ——「壁」の増殖”に対峙する“共存・共在の智”にむけての 探求型フィールドワーク——

新 原 道 信

キリスト教が成立するはるか以前から在る、異なる民のいくつもの“智慧 (sapere)”と“智慧 (saggezza)”——異質にしてひとつのヨーロッパ (*una Europa eterogenea*)。砂の一粒一粒から岩が形成されていくように、ひとびとは、多方向へと旅立ち、帰還し、入植し、再び旅立つ。移動はくりかえされ、“出会い”、“衝突・混交・混成”し、“重合”していく。鍾乳洞の石筈が、時を経て、石灰質の混じった水滴からひとつの石柱へと形成されていくように生成するいくつものヨーロッパ (*una Europa delle 'Europe'*)。ロマやサミの民がみたヨーロッパ、ヴァイキングや地中海の民の暮らしの中に在った“多系／多茎の可能性 (le vie possibili verso i vari sistemi alternativi)”が創る“いくつものもうひとつのヨーロッパ (varie altre 'Europe')”。異端、異物、異質性、異文化、移動、航海、出会い、根、岬、半島の“衝突・混交・混成・重合の歩み (percorso composito)”——“社会文化的な島々”から見た“願望のヨーロッパ (Europa che vorremmo)”。(第17回よこはま21世紀フォーラム開催にあたって、第3セッション「『もう一つのヨーロッパ』と日本の可能性」参加者への呼びかけ文より)

1. はじめに

本稿は、このたび教授職を退任される西島益幸先生をはじめとして、横浜市立大学において筆者が出会った智者との協業の意味をふりかえることを眼目として書かれている。筆者が横浜市立大学在職中(1993年から2003年まで)に成し得た知的協業のなかで、もっとも大きな意味をもっている

のは、西島先生がとりまとめ役の一人として実現した第17回よこはま21世紀フォーラム「ヨーロッパ統合と日本」（2000年10月21～22日、於・横浜シンポジウム）である。本シンポジウムは、記録集の総括部分に収録された阿部謹也「アジア統合は可能か」、松井道昭「統合と多様性」でも示されているように、ヨーロッパ統合の実質を問うことが、ひるがえって、自らへの（すなわち日本およびアジア社会への）、「対話的／対比的な問いかけ（dialogic and contrapuntal asking questions）」ともなっていた。そのなかで、小野塚知二「ヨーロッパにとっての『外』と『異物』」、新原道信「統合しないヨーロッパ・願望のヨーロッパ」など、「国民」「市民」といった枠組みからはみ出すひとびとの存在が顕在化するプロセスに着目し、異質性を含み混んだ社会を、どのように構想・構築し得るのかも問われていた¹。

西島先生が招聘されたマイケル・ピオーリや中岡哲郎先生、総括報告をされた阿部謹也先生、新原が招聘したアルベルト・メルレルのイタリア語の論稿など、シンポジウムの記録集を読み返しながら、あらためて、21世紀が始まる直前に考えようとしていた“異質性の衝突・混交・混成・重合によってつくられるコミュニティ（*composita comunità dalle eterogeneità*）”としての“願望のヨーロッパ”を再考する必要性を感じている。とりわけいま（現在），“願望のヨーロッパ”を再考するのは、世界各地で噴出する“異物への過剰な拒否反応（*strafobia*）”としての“「壁」の増殖（*proliferation of 'barrier'*）”との対峙を念頭におくが故である。

¹ 2000年のシンポジウムの成果は、第17回よこはま21世紀フォーラム実行委員会『ヨーロッパ統合と日本』（『横浜市立大学論叢』社会科学系列第52巻第2号）としてとりまとめられている（阿部 2001）（松井 2001）（小野塚 2001）（新原 2001）（Merler 2001）。西島益幸教授は、第1セッション「日欧の生産システムと労使関係」の責任者であった（西島 2001）。その後、第2セッション「ヨーロッパ統合史と21世紀のアジア」の責任者であった永岑三千輝教授（永岑 2001）をとりまとめ役とした著作が刊行され、メルレルと筆者もここに寄稿させていただいた（新原 2004）（Merler 2003=2004）。

この小論では、21世紀を迎える直前の2000年に構想していた“願望のヨーロッパ”を再考する。その後の20年の推移のなかで、いま私たちが直面している“「壁」の増殖 (proliferation of ‘barrier’) ”に対して、“新たな問いを立てる (formulating new questions)”ことをめざす²。そのための方法、すなわち“対話的／対位的に問いかけ続ける (keep asking questions dialogically and contrapuntally)”方法として練り上げてきたフィールドワークによって、“共存・共在の智 (saggezza di convivenza, wisdom of coexistence)”を探求する。

この全体構想のなかで、本稿においては、〈「壁」の増殖〉に対するオルタナティブとしての“共存・共在の智”を、“探求型フィールドワーク (Exploratory Field Work)”によって明らかにすることに、いかなる今日的な意味があるのか〉という「問い」への応答を試みる。

² 本稿で紹介するメルレルと同じく新原の共同研究者であったメルッチ (Alberto Melucci, 2001年9月に白血病で天逝した) は、“新たな問いを立てる (formulating new questions)”ことの今日的意味について以下のように述べている：

こんにち必要なのは、問題のなかに予め答えが含まれているような問題解決だけではなく、新たな問いを立てることに私たちの創造的な力を向けることであるということが、ますます明らかになってきている。……私たちの社会は、創造的プロセスを促す個人の資源を發展させていくという試みに直面している。すなわちそれは、リスクを受け容れ、規定できないものを甘受し、既に知られ、分類され、決定されていたかに見えるものを、一時保留にすることを厭わないような能力である。それはまた私たちの心を開き、新たな領域を切り拓くために、自分自身の抑制や不安定さを乗り越えていく能力である (Melucci 1996=2008: 196)。

2. 2000年の“願望のヨーロッパ”

本稿の冒頭に再録したのは、第17回よこはま21世紀フォーラム開催にあたって、第3セッション「『もう一つのヨーロッパ』と日本の可能性」の参加者に送った呼びかけ文である。

この文章に影響を与えていたのは、ドイツの作家エンツェンスベルガー (Hans Magnus Enzensberger) である。エンツェンスベルガーは、「ヨーロッパ統合」を目前にひかえた1987年に、『嗚呼！ヨーロッパ 2006年に記されるエピローグと七つの国の知覚 (*Ach Europa! Wahrnehmungen aus Sieben Ländern mit einem Epilog aus dem Jahre 2006*)』という著作を発表している。エンツェンスベルガーは、この作品のなかで、スウェーデン、イタリア、ハンガリー、ポルトガル、ノルウェー、ポーランド、スペインという、「ヨーロッパの辺境」とみなされる土地を歩き、日常生活の中に脈打っている様々な「知覚 (Wahrnehmungen)」、すなわち“記憶”や“経験”として、沈殿し、折り重なっているところの「真実 (Wahr)」の“智恵 (sapere)”と“智慧 (saggezza)”を受け取ろう (nehmen) とした。

同書のなかでエンツェンスベルガーは、「所得分布や方言、選挙の動向、宗教、教育程度、人口移動、食習慣……きっちりとした数では表すことができない……どこまでも不規則な断片 (フラクタル) から成る」ヨーロッパ、「欠陥の寄せ集め以外の何物でもなく「お互いに補完してバランスをとらなきゃならない」ヨーロッパを、「管理者と軍事専門家とテクノクラートのヨーロッパ」に対置した (Enzensberger 1987=1989: 573, 445-446, 570)。それは、アイロニカルな“願望”であり、「差異性を生命として」、独自の地位を保ってゆこうとする (あくまで「大陸」ではない) 「ヨーロッパ半島」という“企図”である。

ひとの移動から世界を見ることを試み、“移動民 (homines moventes)” が生きられる場についての考察を重ねてきたイタリアの社会学者メルレル

(Alberto Merler) は、自らの“背景 (roots and routes)”³への理解もこめて、“異質性の衝突・混交・混成・重合によって生まれる”ヨーロッパに向けての構想を述べた：

互いが異質なる他者であることを自覚し他者理解の道程を省略することなく・・・・・・互いを異端としてそれでも対話を試みるということであり、“対話をする差異 (le differenze dialoganti)”・・・・・・いくつものヨーロッパが共存するという地平にひとたび立ったならば、もはや、経済的、制度的、組織的次元に収斂するということはできない。われわれはもはや、複数のものが“複合・重合”しひとつのものとしてなりゆくヨーロッパ、われわれが望むところの“願望のヨーロッパ (una Europa che vorremmo)”・・・・・・いくつものもうひとつのヨーロッパが出会い、衝突し、対話を試み、“混交し混成する重合性”となりゆくことで生成するヨーロッパ・・・・・・ヨーロッパ統合は、ただ単に、既存の世界システムの枠内で、あるいはまたそれへの反応としてのみあるのでなく・・・・・・“社会文化的な島々”がつらねられた社会を練りあげていく営みとしてもすすめられているのだ (Merler 2003=2004: 293-295)。

メルレルは、自分自身をヨーロッパ統合の「内にして外／外にして内 (endo/esogeno, endo/exogenous)」にあるような存在と位置付けた。ヨーロッパにとって、内なる「異質な他者」「異端」であるメルレルからする

³ メルレルは、イタリアとドイツ語文化圏を結ぶトレントで生まれ、サンパウロに育ち、サンパウロ大学の大学院で“共存・共在の智”に基づく社会学を構想し、セネガル・パリを経て、イタリアの大学で教鞭をとった。メルレルの“固有の生の軌跡 (roots and route of the inner planet)”と“社会文化的な島嶼性論 (visione di insularità socio-culturale)”については、(新原 2017)を参照されたい。

なら、ヨーロッパ「半島」は、自らの内部の「中心／周辺」「内／外」の構造を地球規模に拡大していった「コロンブスの発見」以来の「植民地支配」が生み出した「欠けたる存在」とされた人々によって、その理念と内実を問われている。

構築すべきは、異質性・他者性も含み混んだ“ひとつのヨーロッパ (una Europa eterogenea) ”、国境・境界、歴史的につくられた枠組みそのものを呑み込み、引き受けつつ、越えるところのヨーロッパ、これが2000年の時点での“願望のヨーロッパ”であった (Merler 2001: 202-203)。

3. 1989年の「ベルリンの壁崩壊」とその後の“「壁」の増殖”

新原とメルレルは、1987年以降、ずっといっしょに行動し、1989年11月のベルリンの壁崩壊、1994年12月のチェチェン紛争勃発、1995年1月の阪神・淡路大震災と3月の地下鉄サリン事件、1999年3月のコソボへのNATO軍空爆、2001年10月のアフガニスタンへの空爆、2003年3月のイラク侵攻、2011年1月のチュニジア・ジャスミン革命とエジプトの反体制デモ、そして「3. 11」——その他、多くの場に「居合わせる (being there by accident at the nascent moments in which critical events take place) ”機会をともにし、対話を続けてきた (新原 2011a, 2011b, 2014, 2016, 2017, 2019, 2020)。

とりわけ1989年の「ベルリンの壁崩壊」は、“いくつものもうひとつのヨーロッパ (varie altre 'Europe') ”に生きる場が与えられることへの“願望と企図の力 (ideabilità e progettualità) ”と深くかかわるものだった。しかしながら、その後の流れをふりかえれば、シンポジウム翌年の「9. 11」からアフガニスタン、イラク、世界金融危機、さらに東日本大震災と、地球規模のシステム化・グローバル化がもたらす“受難者／受難民 (homines patientes) ”の増大、個々人の社会的痛苦に起因する社会紛争と社会統合の危機はきわめて深刻な国際社会問題となっていった。

現代社会は、地域紛争、テロ、ヘイトクライム、核の脅威、放射能、身

心の不安・ストレス・病、等々、「地域」や「国家」を基準とした政治体制で制御できない“多重／多層／多面”性をもった複合的問題（the multiple problems in the planetary society）”、メルッチの言葉で言えば、「惑星社会のジレンマ」に直面している⁴。

「問題解決（problem solving）」という枠組みの有効性が疑問視される状況下で、国民社会・地域社会レベルのジレンマに対する不安・不満は、近年、「異物への過剰な拒否反応」を引き起こし、移民・難民、障がい者、老人・女性・LGBT・子どもたち等のマイノリティが標的となっていく。可視的な現象として、メキシコ・アメリカの「壁（barrier, muro）」の建設のみならず、ヨーロッパをめざす難民・移民に対するハンガリー他の国境封

⁴ メルッチは、（これまで社会と個人を論じるときに入ってはこなかった）自然に関する言説が、「惑星社会の複合的諸問題」を顕在化させると同時に隠蔽もしているとする。複雑性を統治しようとしてなされる意志決定そのもののジレンマは、展開・循環・再帰・反逆していく。自らもまた組み込まれている「網の目」の「外部」から、「自然かテクノロジーかを選ぶ」ことは出来ず、「私たちは皆、自分の身近な環境に関することには潜在的なニンビー（NIMBY「私の庭ではやめてくれ（not in my backyard）」）である」。この背後にあるのは、解決不能な問題であるにもかかわらず、「両極に対立するものからどちらか一方を選択せよというありえない要求を私たちに突きつけてくる」ことで、「決定それ自体の足下にあるジレンマを巧妙に回避し、それを否認して隠蔽する」というメカニズムである。そして、「私たちが講じる対処法は、絶えざる意思決定しかない」となり、ジレンマを「名付け直す」努力を妨げるものとなる。第一のジレンマは、「自律性」と「管理」、個人の「選択」と、行動の管理・制御との間に生じる。第二に、「システムそのものへの自己介入の力を拡大させようとする（全能（omnipotence）への）衝動」と内外の自然からの制約を引き受ける“責任／応答力（responsibility）”との間のジレンマを生み出す。第三に、科学的知識によってもたらされた不可逆な現実と可逆的な選択とのジレンマをもたらす。第四には、「世界システムの惑星地球規模の拡張」により、文化の異質性や多様性に対する「包摂（inclusion）と排除（exclusion）」のジレンマをもたらす（Melucci 1996=2008: 173-176）。

鎖とフェンスの建設、日本でもヘイトスピーチや牛久や大村の入国管理センターでのハンガーストライキ・死亡事件が起こっている。

「壁やフェンス」は、「しばしば民主的国家によって一方的に」建設され、（他者を前提としない）「単なる否定」であり、機能面からは、領土紛争中の国家間（西サハラ、インドーパキスタン、イスラエル）、政治的緊張のある国家間（北アイルランド、インドーバングラディッシュ）、軍事紛争後のフェンス（朝鮮半島、キプロス）、移民・難民の防止フェンス（アメリカメキシコ、モロッコ北部のスペイン領の「飛び地」）に分類される（Novosseloff et Neisse 2007=2017: 11-13）。ベルリンの壁崩壊、東欧革命、アラブの春といった潮流を逆転させるかのように、物理的な意味でも比喩的意味でも、“「壁」の増殖”が起こっている。

この「逆流」の蹉跌を受けとめつつ、メルレルと新原は、「分断」「排除」という「可視的局面」の背後で、諸個人の深部に醸成されている「潜在的局面」を探求・把握することが最重要であると考え、両局面を捉える方法である“探求型フィールドワーク”を行ってきた。

2018年3月には、「壁をすり抜ける移民・難民の玄関口」となってきたイタリア最南端の島ランペドゥーザ島を調査している⁵。チュニジアの首都チュニスよりも南に位置する面積20.2 km²（沖縄の伊江島22.66 km²に相当する）のイタリア最南端の島ランペドゥーザには、サハラ砂漠以南のアフリカ（Africa subsahariana, Sub-Saharan Africa）などからリビアへとやって来た難民が大量に流入し、さらにはチュニジアからの渡航者が増加して

⁵ ランペドゥーザ調査は、2018年3月5日にローマにて、メルレルと新原、横浜市立大学出身でイタリア研究者の鈴木鉄忠（共愛学園前橋国際大学教員）が合流し、シチリア島のパレルモに移動。パレルモで一泊した後、3月6日の早朝にランペドゥーザに入り、3月9日にランペドゥーザからパレルモ、パレルモからローマ、ローマからアルゲロという経路でサッサリまで移動している。その後、ランペドゥーザと石垣について、3月10日にサッサリでセミナーを行った後、3月12日早朝にミラノに移動、ミラノより成田に帰国している。（新原 2019: 162-183）を参照されたい。

いる⁶。

エリトリア人やソマリア人、シリア人など、紛争や圧政から逃れようとして、長く危険な旅の果てに、北アフリカのリビアにたどり着いたものの、リビアの拘留センターでの虐待、(性的)暴力、人身売買に晒され、沈没、水死の危険を覚悟で密航船に乗り込む。そして、この島の切り立った断崖がある側の北西部 (Faglione Sacramento) などに漂着するか、あるいは洋上で救助され、この島に辿り着く。荒浪で遭難の可能性が高いが、「運がよければ」救助され、難民を歓迎して受け入れるという名前が付けられた「難民歓迎センター (il centro accoglienza)」からイタリア、さらにはドイツなどへ移動する。2015年には36万を超える人々が海へと漕ぎ出し、海難事故により5,000人以上の死者および行方不明者が発生している。

2018年5月に成立したイタリアの連立政権は、副首相に就任した右派政党「同盟」の党首サルビーニ (Matteo Salvini) の決定により、移民・難民を救助した支援団体の船の入国を拒否し、移民排斥を訴える政党方針を実行に移している (その影響もあり流入する難民が増加したメリリャ、セウタを、2019年3月に調査することとなった)。

ランペドゥーザの空港近くに、海で亡くなった難民を追悼するため「ヨーロッパの門 (Porta di Lampedusa, porta d'Europa. Un monumento alla memoria dei migranti deceduti in mare)」というモニュメントがつくられている。実際にその場所に行ってみると、「ヨーロッパの門」の近くには、1930年代に「外敵」の上陸に備えて作られたトーチカ [掩体壕] (casamatta) がいまなお残っている。「外敵」の根絶・排除という「教条」によりナショナリズムが勃興した二つの大戦の時代から、「ひとつのヨーロッパ」とい

⁶ ドキュメンタリー映画『海は燃えている (FuocoAmmare、監督：Gianfranco Rosi、2016年イタリア)』や、海外ドキュメンタリー「死の海からの脱出 (Aquarius Rescue in Dead Waters、制作：Point du Jour、2016年フランス、BS1で2017年9月12日放送)」や、(Bartolo e Tilotta 2017) (北川 2010, 2012, 2018) (眞城 2017) (南波慧 2017) などがある。

う“願望と企図”が生まれ、再びまた、移民・難民等の異物の根絶・排除をかかげるポピュリズムが再燃している。そのなかで、紛争地帯から命がけで逃げてきた“受難者／受難民 (homines patientes)”たちは、“願望のヨーロッパ”が消失しつつある場所を目指して小舟で漕ぎ出し続け(新原 2019: 170-171)、新たな“「壁」の増殖”に直面している。

4. “共存・共在の智”生成の可能性

こうして、メルレルと新原の焦眉の課題は、〈今日の「異端・異物を排除・根絶する力」を縮減するような“共存・共在の智 (sagezza di convivenza, wisdom of coexistence)”はいかにして生成、あるいは生かし直されるのか〉というものとなった。

メルレルとの間では、このような問題意識から、1987年以降、サルデーニャ(イタリア自治州)、コルシカ(フランス)、ケルン(ドイツ)、コペンハーゲン・ロスキレ(デンマーク)、サンパウロ・リオデジャネイロ・エスピリトサント(ブラジル)、川崎・鶴見、沖縄、北海道、広島、長崎、マカオ(中国への返還以前)、濟州島(韓国)、リスボン(ポルトガル)、アゾレス(ポルトガル自治行政区)、カーボベルデ(カーボベルデ)、ストックホルム、エステルズンド(スウェーデン)、オーランド(スウェーデン語が公用語となっているフィンランドの自治領)、ヴァッレ・ダオスタ(イタリア・フランス・スイスの間国境地域)、トレンティーノ＝アルト・アディジェとアルプス山間地(イタリア・オーストリア・スイスの間国境地域)、フリウリ＝ヴェネツィア・ジュリアとゴリツィア／ノヴァ・ゴリツィア(イタリア・オーストリア・スロヴェニアの間国境地域)、トリエステからイストリア半島(イタリア・スロヴェニア・クロアチアの間国境地域)、ランペドゥーザ、メリリャ、セウタ、ジブラルタルなど、日本社会とヨーロッパ社会とかかわりの深い地域社会、国家の「中心」から見るなら“端／果で”とされるような地域の“深層／深淵”を「理解」するための“探究／探求”をしてきた(新原 2011b)。

“共存・共在 (convivenza, coexistence)”という在り方 (ways of being) の“背景”に在るのは、メルレルのブラジルでの体験である。メルレルの理解によれば、ブラジルには、先住民、ヨーロッパ人、アフリカ人という三つの系譜があり、19世紀頃から「ともに生きること、ともに暮らすこと (con-vivere)」が定着していった。その後、世界各地から、アラブ人、日本人なども含めて、大量の移民がブラジルへ流入する。メルレルの“社会文化的な島嶼性論 (visione di insularità socio-culturale)”にとって重要な概念である「共同性、社会的必要への注目、支配層の意味、共生」などは、すべてブラジルで生まれた。「世界はひとつではない、複数の固有性、“多系／多茎の可能性”が在るという“トータルな直観 (intuizione composita)”がブラジルで生まれた」(新原 2017: 79-80)。

メルレルと新原は、2018年3月のランペドゥーザ調査に続いて、2019年3月には、「移民・難民の防止フェンス」が建設されたメリリャとセウタ(モロッコ内のスペインの「飛び地」とイギリスに統治されるスペイン・アンダルシア地方のジブラルタルで調査を行っている⁷。“国境地域／境界領域 (borderland, frontier/liminal territories) ”、“端／果で”とされるような地域は、さらなる領土と領海獲得をめざす大陸の中心部から見て、国家戦略的・商業的・軍事的・文化的な前哨基地として確保されるべきものでもあり、「西／東」「北／南」などの境界として、くりかえし危機的瞬間に直面してもきた (Merler e Niihara 2011a=2014: 81-82)。それゆえ、“境界領域を生きるひと (gens in confinem)”の対位的な身体感覚——国家や権力の“線引き (invention of boundary) ”、“境界線の移動 (confine mobile)”によって引き起こされる“社会的痛苦”のなかで、複数性と多岐性 (molteplicità) を伴って紡ぎ出される生存のための“智”を理解する方法を培う必要がある

⁷ 2019年3月15日から24日にかけて、新原と鈴木鉄忠がパリ経由でマラガに入り、マラガでメルレルと合流し、マラガから空路でメリリャ、メリリャからマラガ経由で陸路アンダルシア地方のコスタ・デル・ソルを西へ移動、アルヘシラスから陸路ジブラルタル、さらに海路でセウタへ移動した。(新原 2020: 53-60) を参照されたい。

と考えた。

北アフリカにおけるスペインの前線基地 (frontera) であったメリリャとセウタでは、とりわけ 2005 年秋以降、サハラ砂漠以南のアフリカの人々が流入したため、有刺鉄線や金網の強化、レーダー、監視カメラ、マイク、センサーの設置、治安警備隊 (guardia civil) の増強などが行われた。こうした可視的な変化としての「壁」の増殖⁸について報道されているが、実際に現地を歩いてみると、たとえばメリリャでは、長い時間かけてつくられてきた“共存 (convivencia) の智慧”の蓄積があった。キリスト教徒、ユダヤ教徒、イスラム教に加えて、18世紀頃からはジブシーの文化、さらにはヒンディーの文化が入り込み、すでに20世紀初頭には、A.ガウディとともに仕事をしたメリリャ出身の建築家E. ニエト (Enrique Nieto) により、モダニズム建築の町並みがつくられていた。ニエトの設計による、モスクやシナゴグも建てられていたが、これは、20世紀初頭にはすでに、メリリャにおいては、ユダヤ教徒やイスラム教徒がメリリャ社会に組み込まれ、階層的にも中上層となっている一族がいたことを示している⁸。

メリリャという「飛び地」のなかにはまた、植民地戦争以前から「壁」の増殖以降の現在に至るまで、様々な時期に流入してきたモロッコ人、ベルベル族、サハラ以南のアフリカ系、中東から移動してきたアラブ人などによるいくつもの「飛び地」(“社会文化的な島々”)がつくられている。この“複合・重合性 (compositezza)”が一定の定常性を維持しつつ、外部からの介入によって揺りうごかされ続ける歴史としてメリリャの現在をとらえることが出来る。

メルレルが、アルプス山間地・ブラジル・アフリカ・地中海を介して醸成してきた“社会文化的な島々”から惑星社会の“共存・共在”の可能性を把握

⁸ メリリャ調査については、その成果の一部を、新原道信「惑星社会の諸問題を引き受け／応答する“臨場・臨床の智”に向けて——“惑星社会のフィールドワーク”は現代社会認識に寄与するのか」(新原 2020:41-80)で紹介している。メリリャ、セウタについては、(Novosseloff et Neisse 2007=2017:265-293)でも紹介されている。

するという見方 (visione) は、「分断」「衝突」「紛争」「排除」「浄化」といった言葉でとりあげられているテーマについて、より実質的な再解釈と、学問と社会構想の両面で革新をもたらす可能性を有していると考えられる⁹。

5. “探求型フィールドワーク”の今日的意味

ここまで述べてきたような見方 (visione) による“探求型フィールドワーク”を積み重ね、2000年の21世紀フォーラムからの社会構想とその後の“「壁」の増殖”に応答することを念頭に置き、第27回中央大学学術シンポジウム「地球社会の複合的諸問題への応答 (Responses to the Multiple Problems in the Planetary Society)」(主催・中央大学社会科学研究所)を、2018年12月に開催した。

このシンポジウムの問題意識は、〈惑星地球規模となった現代社会で生起しつつある複合的問題の意味を理解し比較する学はいかにして可能か、異なるタイプの他者との相互理解、社会的痛苦の縮減を可能とする開発・文化・政治・経済・社会をどのように構想するのか〉というものであった。

⁹ “共存・共在の智”の要請に対しては、異質性を含み混んだ「〈全世界〉(le Tout-Monde)」を構想するグリッサン (Glissant 1990=2000, 1997=2000) 等のクレオール思想や、イタリアのランゲル (Langer 2011[1996]) やカッチャーリ (Cacciari 1997) によって「共生 (symbiosis, conviviality)」「群島 (arcipelago)」といった概念が提示されている。南米を代表する社会学者のイアンニも、ブラジルにおける異質な他者との“共存・共在”に基づき、「水平的」なグローバリズムを提唱した (Ianni 1996=1999)。サンパウロ大学でイアンニから学んだメルレルは、“共存・共在の智”と、言語・文化・社会集団の“衝突・混交・混成・重合の歩み”の意味を深く考察し、“社会文化的な島嶼性論”を提唱した。ジラルディは、メルレルと社会認識を共有しつつ、キューバやニカラグア、チアパスでの取り組みから「民衆が参加する調査法 (ricerca partetipativa popolare)」により“共存・共在の智”を構想し実践した (Girardi 1994)。

フィールドワーク、意識調査、理論的研究の3つのチームに分かれ、“惑星社会の諸問題を引き受け／応答する（responding for/to the multiple problems in the planetary society）”ことを試行した。

新原が研究代表となったフィールドワークに基づく研究チームによる第1セッション「地球社会のジレンマに応答する“臨場・臨床の智”に向けて」では、イストリア半島、ランペドゥーザ島、石垣島などの国境（島嶼）地域のフィールドワークと、大久保・砂川などの都市コミュニティ研究の成果が報告された。この報告に対して、参加者からは、一見すると無関係に見える「諸地域のフィールドワークが惑星社会の問題とどう関連しているのか」といった、グローバル社会の全景把握と構造認識をめぐる疑問が提示された。以下、（新原 2019）の序章と第1章で考察した点を深化させることを本稿で試み、結びとしたい。

今日の社会科学においては、ビッグデータの収集による国際比較が主流となっており、その対極に位置するかたちで、個別的な質的データを「珍重」あるいは「個別性」を過度に主張する傾向も存在している。新原とメルレルは、“対話的にふりかえり交わる（*riflessione e riflessività*）”、対比・対話・対位を重視するかたちで、1987年以降、18カ国、28地域での共同調査のなかで、“探求型フィールドワーク”の理論と方法を錬磨してきた。“探求型フィールドワーク”は、臨場・臨床的（clinical）かつ全景把握的（visionary）という対位的な特徴を持っている：

①臨場・臨床的（clinical）の条件としては、「潜在的局面」の把握を可能とする調査地の言語・文化への深い理解が必要となる。メルレルは、南米、アフリカ、ヨーロッパの諸地域の歴史の理解・文化の理解に加えて、ポルトガル語、イタリア語、スペイン語、フランス語を母語とし、ラテン語、英語、ドイツ語、アマゾンやアフリカの現地語、ヨーロッパの少数言語を駆使する。新原は、イタリア留学後、イタリア語の他、ドイツ語、ラテン語、フランス語、英語、ポルトガル語、スペイン語等の言語により、各地の研究者、調査地住民とのコミュニケーションを行ってきた。

②全景把握的（visionary）の条件としては、「フィールドワークはグロー

バル社会の問題把握にとって有効か」という疑問に答える社会理論が必要となる。メルレルは、異質な諸要素の“共存・共在の智”の意味を深く考察し、ひとの移動と衝突・混交・混成・重合によって変化し続ける個々人と社会のうごきを、“社会文化的な島々 (isole socio-culturali)”という概念によって世界を捉える社会理論を創出した (Merler 1996) (Merler e Niihara 2011a, 2011b)。“探求型フィールドワーク”は、地域に深く入り込むと同時に、グローバル社会のトタリティを大きく把握する vision を兼ね備えた〈エピステモロジー／メソドロジー／メソツズ〉である (新原 2014 : 113-157)。

現在この“探求型フィールドワーク”により準備しているのは、メルレルの“共存・共在の智”の原点となったブラジル調査であり、これまですすめてきた一連のフィールドワークからの知見を総合するための重要な結節点となるものである。具体的には、ブラジル北東部とりわけフェルナンド・デ・ノローニャを主たる調査地として、〈“共存・共在の智”の存立基盤はいかなるものか、どのように伝達可能となるか〉を明らかにする¹⁰。

¹⁰ 現地調査では、以下のような手順で“探求型フィールドワーク”を行う予定である：

①「可視的局面」としての「壁」の増殖の現況把握：たとえばメリリャ調査では、四重のフェンスにより「壁」が建設されている同地の入国管理局、検問所、難民センター、地形も含めた街路の状況を調査し、キーパーソンからの聴き取り調査を行った (調査にはスペイン語、フランス語、その他の現地語を使用した)。現地語により土地の人々に「問いかけ」(モロッコへの帰属の可否についてなど)、対話のなかで相手の深層意識(「心の習慣」「ハビトゥス」)を浮かび上がらせた。②「潜在的局面」としての“共存・共在の智”の探求：調査全体をビデオ・写真・メモ等で記録し、複数言語でフィールドノーツを書き、調査者間およびキーパーソンとの間でリフレクション・対話の時間を多くとった。その結果、メリリャでは、短期の「壁」の増殖の背後で、中長期の持続による“共存・共在の智”の蓄積を確認した (新原 2020: 53-60)。本研究は、ブラジルで中長期の持続により形成されてきた“共存・共在の智”に対する、短期の「分断」「排除」の力の波及、そこから“智”を“組み直す (ricomporre, recompose)”プロセスを捉えることを獲得目標とする。

メリリヤ、セウタ、ランペドゥーザに加えて、ブラジル北東部のエスピリトサント、ペルナンブーコとフェルナンド・デ・ノローニャでの調査から得られた知見をとりまとめ、“「壁」の増殖”が可視化・顕在化するなかで、“border-(is)land（国家間関係の「中心」から見た「境界領域（frontier/liminal territories）」）”の「潜在的局面」において蓄積されてきた“智”が、“「壁」の増殖”問題に応答するかたちで組み直されることで、新たな地球規模の社会において異質性が“共存・共在”し得ること、またこの“智”が他の地域にも伝達可能となる条件を示す予定である¹¹。

¹¹ 臨場・臨床的 (clinical) に行ってきたランペドゥーザ、メリリヤ、セウタ、ジブラルタルと、狭い領域 (テリトリー) での“探求型フィールドワーク”は、長期的持続による“衝突・混交・混成・重合の歩み”を理解するという全景把握的 (visionary) な構想のもとになされていた。この観点から、南米のスリナム (オランダ領ギアナ)、フランス領ギアナ、ガイアナ (イギリス連邦)、そしてブラジル北東部、とりわけ“自然地理的・社会文化的・主権のおよぶ島 (isola fisica, socio-culturale e sovranità statale)”であるフェルナンド・デ・ノローニャ (Fernando de Noronha) を見ておく必要がある。地中海から大西洋、南米へという経路・航路以外にも、地中海から北西への航路、すなわち、アイスランドやフェロー諸島も重要である。ヴァイキングは、地中海から黒海・カスピ海まで南下・東進すると同時に、アイスランド、グリーンランドを経て、北アメリカ大陸のニューファンドランド島にも達していた。世界システム以前の航海者の“衝突と出会い”という点では、ポルトガルの航海者たちと並んで重要だと考えられる。東地中海のロードス島と12の島々、キプロスもまた (“壁”の増殖) というカンテ院からも重要である。さらに、アゾレス、カーボベルデまで辿ってきた航路を、インド、マラッカ海峡とすすめて、東ティモールと西ティモールの「飛び地」にはまだ行く必要がある。チャモロの民が辿り着き、先住していたグアム、サイパン・テニアン・ロタも重要である。

6. おわりに

本稿のおわりに、冒頭の問い——“「壁」の増殖”に対するオルタナティブとしての“共存・共在の智”を、“探求型フィールドワーク”によって明らかにすることに、いかなる今日的な意味があるのか——に立ち返りたい。

“探求型フィールドワーク”は、近代化・ヨーロッパ文明化・世界システム化という方向性に「回収」されないかたちで、各所・各地に存在してきた“多系/多茎の可能性”を“すくい（掬い/救い）とり、くみとる（scoop up/out, scavare, salvare, comprendere）”可能性を持つ。

全景把握の鳥瞰力と微細的できめ細やかな凝視の力を“組み直す（ricomporre, recompose）”。「点」から「点」を「解」するのでなく、惑星地球をひとつの「海」として、そこに浮かぶ社会文化的な島々の“衝突・混交・混成・重合の歩み（percorso composito）”を捉える。

この試みにより、知見・知覚の「自然な集積の結果」によって生まれた共生（convivenza）、協業（cooperazione）、さらには“共成（co-sviluppo）”の在り方（ways of being）から社会を構想していくことに向けて、“新たな問いを立てる”可能性が開かれていくと考えている¹²。

¹² 現在、日本・イタリア・ブラジル・カナダ・インド等の研究者との間で「社会文化的な島嶼」における地域密着型研究:国際的CBPR ネットワークの構築(Community-Based Participatory Research in “Socio-Cultural Islands” : Co-creation of International CBPR Network)の準備をすすめている。この国際共同研究は、国家や地域の枠組みを超えた複合的な地域問題への応答をめざし、日本・イタリア・ブラジルにおける地域密着型研究の蓄積を基盤として、〈異質な他者が水平的な関係性を構築するかたちでのコミュニティ形成はいかにして可能か〉という「問い」に応えることをめざしている。メルレルと新原は、「3. 1 1以降のイタリア・日本の地域問題（「生存の場としてのコミュニティの“共創・共成”）」を共同研究テーマとして、メルレルの社会理論に基づき、立川・砂川地区とサッサリ市サンタ・マリア・ディ・ピサ地区を、都市の内なる“社会文化的な島々”

たとえば以下のような“対話的／対位的な問いかけ（dialogic and contrapuntal asking questions）”である。

地球規模の複合的諸問題に応答する“共存・共在の智”——惑星地球をひとつの海として、社会をそのなかに浮かぶ島々として体感するような“智”——を、いかにして紡ぎ出すのか。地球の、他の生き物の、他の人

として捉え、相似形の地域密着型研究に着手した。メルレルが主導する研究組織 FOIST/INTHUM は、1977年の創立以来、コミュニティ研究者と「社会のオペレーター（教育・福祉・社会政策などの分野で地域住民と行政とをつなぐ役割を果たす高度職業人）」の育成を追求してきた。メイレスとフォレストが主導するエスピリトサント連邦大学の地域研究組織 MEPES は、P. フレイレの伝統を継承し、地域密着型の国際共同研究を FOIST/INTHUM との間ですすめてきた。Unesco Chair/PRIA は、国際的 CBPR ネットワークの中心である。この国際的 CBPR ネットワークに対して、ブラジル（イタリア・日本）発の“共存・共在の智”を生かし直すことを通じて、世界各地での CBPR 活動への波及効果を準備しようと考えた。準備状況としては、イタリア・サッサリに、日本からは毎年、ブラジル、カナダ、インドからは隔年のペースで研究者が集まり、国際シンポジウムと共同調査をすすめてきており、メルレル・新原のエスピリトサント連邦大学への招聘・受け入れが確定している。Unesco Chair/PRIA と日本側は、2017年から連携に着手しており、メルレル・新原の共同研究については、シンポジウムでの報告や論文により Unesco Chair/PRIA でも共有されている。現在刊行準備中の MEPES の 50 周年記念誌には、メルレルがポルトガル語、新原がイタリア語で寄稿している。メルッチおよびメルレルとの協業については、日本語での著作・論文以外にイタリアでも複数の著作・論文を公刊している（Nihara, Touraine, Bauman, Leonini et.al. 2003; Merler e Nihara 2011a, 2011b）。海外共同研究者間の共同研究の成果は、フォレスト・メルレル・ヴァルジウ（Foreste, Merler and Vargiu 2017）、メルレル・ラッザリ・新原（Merler, Giolio e Lazzari 1999）、CBPR 国際ネットワークの研究成果（Hall, Tandon, et al. 2014）等を公刊している。

間の“不協の悲鳴 (le grida disfoniche) ”、同時多発的に継続的に、表面上の「調和」「安定」を揺りうごかす叫び声を“感知し (perceiving/sensing/ becoming aware, percependo/intuendo/ diventando consapevole) ”、“感応する (responding/sympathizing/ resonating, rispondendo / simpatizzando / risonando) ”ことを、いかにして可能とするのか。“探求型フィールドワーク”はその課題を引き受け／応答するものたり得るのか。そのためにはいかなる条件があるのか。

引用・参考文献

- 阿部謹也、2001「アジア統合は可能か」第17回21世紀フォーラム委員会『ヨーロッパ統合と日本』（『横浜国立大学論叢 第17回21世紀フォーラム特集号』社会科学系第52巻第2号）。
- Bartolo, Pietro e Lidia Tilotta, 2017, *Lacrime di sale. La mia storia quotidiana di medico di Lampedusa fra dolore e speranza*, Milano: Mondadori.
- Cacciari, Massimo, 1997 *L'arcipelago*, Milano: Adelphi.
- Enzensberger, Hans Magnus, 1987, *Ach Europa! Wahrnehmungen aus Sieben Ländern mit einem Epilog aus dem Jahre 2006*, Frankfurt am Mein: Suhrkamp. (=1989, 石黒英男他訳『ヨーロッパ半島』晶文社)
- Foerste, Erineu, Alberto Merler and Andrea Vargiu, 2017, “Partnership in Teacher Education: A Theoretical and Practical Analysis”, in *Creative Education*, Vol. 8 No. 8.
- Glissant, Édouard, 1990, *Poétique de la relation*, Paris: Gallimard. (=2000, 管啓次郎訳『〈関係〉の詩学』インスクリプト)
- , 1997, *Traité du tout-monde*, Paris: Gallimard. (=2000, 恒川邦夫訳『全—世界論』みすず書房, 2000年)
- Hall, Budd, R. Tandon, R. Munck and L. McIlrath, 2014, *Higher education and community-based research: Creating a global vision*, Cham: Palgrave Macmillan.

- Ianni, Octavio, 1996, *A Era Do Globalismo*, Rio de Janeiro: Civilização Brasileira (=1999, traduzione di Francesco Lazzari, *L'era del globalismo*, Padova: CEDAM)
- 北川真也, 2010 「移動=運動=存在としての移民——ヨーロッパの「入口」としてのイタリア・ランペドゥーザ島の収容所」、『VOL』以文社、第4号。
- 、2012 「ヨーロッパ・地中海を揺れ動くポストコロニアルな境界——イタリア・ランペドゥーザ島における移民の「閉じ込め」の諸形態」、『境界研究』No. 3。
- 、2018 「移民たちの船の物質性とモビリティ——地中海・ランペドゥーザ島の『船の墓場』からの問い」、『観光学評論』、観光学術学会、6巻1号。
- Langer, Alexander (a cura di Edi Rabini e Adriano Sofri, 2011[1996]), *Il viaggiatore leggero. Scritti 1961-1995*, Palermo: Sellerio.
- 眞城百華, 2017 「地中海を渡るアフリカ難民の検討——アフリカの角の事例から」『多文化社会研究』Vol.3。
- 松井道昭, 2001 「統合と多様性」第17回21世紀フォーラム委員会『ヨーロッパ統合と日本』（『横浜市立大学論叢 第17回21世紀フォーラム特集号』社会科学系列第52巻第2号）。
- Melucci, Alberto, 1996, *The playing self: Person and meaning in the planetary society*, New York: Cambridge University Press. (=2008, 新原道信他訳『プレイング・セルフ——惑星社会における人間と意味』ハーベスト社)
- Merler, Alberto, 1996, *Regolazione sociale. Insularità. Percorsi di sviluppo*, Cagliari: Edes.
- 、G. Giorio e F. Lazzari (a cura di), 1999, *Dal macro al micro. Percorsi socio-comunitari e processi di socializzazione*, Verona: CEDAM.
- 、2001, “Realtà composite e isole socio-culturali. Il ruolo delle minoranze linguistiche”, 第17回21世紀フォーラム委員会『ヨーロッパ統合と日本』（『横浜市立大学論叢 第17回21世紀フォーラム特集号』社会科学系列第52巻第2号）。
- 、2003, *Realtà composite e isole socio-culturali: Il ruolo delle minoranze linguistiche*. (=2004, 新原道信訳「マイノリティ」のヨーロッパ——“社会文化的な島々”は、“混交、混成し、重合”する」永岑三千輝・廣田功編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社)
- e M. Niihara, 2011a, “Terre e mari di confine. Una guida per viaggiare e comparare la Sardegna e il Giappone con altre isole”, in *Quaderni Bolotanesi*, n. 37. (=2014, 新原道信訳「海と陸の“境界領域”——日本とサル

- デーニャを始めとした島々のつらなりから世界を見る」新原道信編『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部)
- e M. Niihara, 2011b, “Le migrazioni giapponesi ripetute in America Latina”, in *Visioni Latino Americane*, Rivista semestrale del Centro Studi per l’America Latina, Anno III, Numero 5.
- 永岑三千輝、2001「グローバル化時代を生き抜く貴重な示唆」第17回21世紀フォーラム委員会『ヨーロッパ統合と日本』（『横浜市立大学論叢 第17回21世紀フォーラム特集号』社会科学系列第52巻第2号）。
- 南波慧、2017「EU国境地域における<境域>のポリティクス——欧州移民規制レジームの構築とチュニジア人難民」『境界研究』No.7。
- 新原道信、2001「統合しないヨーロッパ・願望のヨーロッパ」第17回21世紀フォーラム委員会『ヨーロッパ統合と日本』（『横浜市立大学論叢 第17回21世紀フォーラム特集号』社会科学系列第52巻第2号）。
- 、2004「深層のヨーロッパ・願望のヨーロッパ——差異と混沌を生命とする対位法の“智”」廣田功・永岑三千輝編『ヨーロッパ統合の社会史』日本経済評論社。
- 、2006「深層のアウトノミア——オランダ・アイデンティティと島の自治・自立」古城利明編『リージョンの時代と島の自治』中央大学出版部。
- 、2007『境界領域への旅——岬からの社会学的探求』大月書店。
- 、2009「境界領域のヨーロッパを考える——移動と定住の諸過程に関する領域横断的な調査研究を通じて」『横浜市大論叢』人文科学系列第60巻第3号。
- 、2011a「A.メルッチの『時間のメタファー』と深層のヨーロッパ——『フィールドワーク／デイリーワーク』による“社会学的探求”のために」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学21号（通巻238号）。
- 、2011b『旅をして、出会い、ともに考える——大学で初めてフィールドワークをするひとのために』中央大学出版部。
- （編著、メルッチ、メルレルと共著）、2014『“境界領域”のフィールドワーク——惑星社会の諸問題に応答するために』中央大学出版部。
- （編著）、2016『うごきの場に居合わせる——公営団地におけるリフレクシヴな調査研究』中央大学出版部。
- 、2017「A.メルレルの“社会文化的な島々”から世界をみる試み——“境界領域の智”への社会学的探求(1)」『中央大学文学部紀要』社会学・社会情報学27号（通

巻268号)。

—— (編著)、2019『“臨場・臨床の智”の工房——国境島嶼と都市公営団地のコミュニティ研究』中央大学出版部。

—— (宮野勝・鳴子博子と共編著)、2020『地球社会の複合的諸問題への応答の試み』中央大学出版部。

Niihara, Michinobu, A. Touraine, Z. Bauman, L. Leonini e gli altri, 2003, *Identità e movimenti sociali in una società planetaria: In ricordo di Alberto Melucci*, Milano: Guerini.

西島益幸、2001「第1セッションの問題意識と討論」第17回21世紀フォーラム委員会『ヨーロッパ統合と日本』（『横浜市立大学論叢 第17回21世紀フォーラム特集号』社会科学系列第52巻第2号）。

Novosseloff, Alexandra et F. Neisse, 2007, *Des murs entre les hommes*, Paris: Documentation française. (=2017, 児玉しおり訳『世界を分断する「壁」』原書房)

小野塚知二、2001「ヨーロッパにとっての『外』と『異物』」第17回21世紀フォーラム委員会『ヨーロッパ統合と日本』（『横浜市立大学論叢 第17回21世紀フォーラム特集号』社会科学系列第52巻第2号）。